

आयुस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足 80

***** 伝統食品から学ぶ食べ物情報 *****

前図書館長・教授 末次信行

食に関する情報がメディアにまるで洪水のように溢れている。消費者が知りたい情報は多岐にわたるが、とりわけ、食品の安全性、健康食品、サプリメント、ダイエットなどが注目的になっている。しかし、食の世界が複雑化して、消費者が自分に必要な情報であるのかどうかを自分で判断するのが極めて難しくなっている。食べ物には多くの食品成分が含まれ、何をどう食べればよいのか、健康を維持するために食べ物に関する正しい知識は子供の頃から教えられ、蓄えられねばならない。そのための教材としてふさわしいものの一つが伝統食品であろう。

伝統食品といえばどんなものが思い浮かぶだろうか。我が国には、みそ、しょうゆ、豆腐、かまぼこ、かつお節、漬物など多くの伝統食品がある。これらの食品はその土地の産物や、気候、風土を生かして作られていて、人々の生活の知恵や技と工夫により、それぞれの食品の形態、風味など、本来の特徴が守り続けられているのである。

伝統食品を作るには、いくつかの共通的な手法が用いられることが多い。たとえば、腐敗・変敗防止に食塩で野菜を漬ける、乾燥してわかめや魚の干物を作る、保存性を高める方法。我が国の気候・風土が微生物の繁殖に適しており、かび、酵母、細菌の作用で原料とは違った独特の風味を生み出す発酵法。微生物の作用を何ヶ月、何年といった長い時間をかけることにより、風味をよくし、よりおいしくすることのできる熟成。豆腐、かまぼこ、ちくわでは原料の不要部分や不快な味を取り除いて食べやすくする方法、などが挙げられる。これらの方法は簡単な道具があればいろいろな食品材料に応用でき、子供たちでも楽しみながら作ることができるかもしれない。そして、その土地本来の伝統食品を手作りしたり、味わってみたりすることで、食品についての情報・知識の

正しさ、必要性を認識するきっかけになるのではないかと思うのである。

今日では伝統食品といえども、すべて手作業であった当時とは異なり、機械化による大量生産、消費者の嗜好の変化に合わせた製品作りで、伝統食品の地方性、季節感、独自性が失われつつあるがために、正しい食べ物情報の普及の妨げになりはしないかという問題点もある。

NHKの、ある食べ物番組をよく見ているが、熊本県のある地方で作られ続けている麦味噌漬の漬物には大いに耳目が引きつけられたのである。だいこん、にんじん、きゅうりなどをていねいに塩漬けし、その後、水で洗って脱塩するいっぽうで、麦麴から手作りで麦味噌を作る。コウジカビが発酵する様子を肌感覚で探る手作業がすばらしい。何ヶ月も漬け込んでやっと出来上がるのである。その映像の中に一瞬、かいま見えた条文があった。「①安全であること ②ごまかしのないこと ③味のよいこと ④品質に応じた妥当な価格」よい食品とはこの4条件に当てはまるものであるとし、伝統食品を作る人々の熱意が映像の中に溢れんばかりであった。そして、これらの漬物物がその地方の日々の食生活、食文化を支え続けているといっても過言ではないのである。

何も知らない子供が、何気なく買った食べ物がいつもよい食べ物とは限らない昨今の世の中である。家庭、学校、地域社会で、よい食べ物の情報・知識を子ども達、若い人達に普及させていくにはどうすればよいのか、伝統食品がその一助になるのではないかと思うのである。

『伝統食品の知恵』 藤井健夫 柴田書店

『伝統食の復権』 島田彰夫 東洋経済新報社

「たべもの新世紀:辛きすつきり山里のみそ漬け」

NHKテレビ総合(放送2007.2.4)

准教授 千古利恵子 (日本文学)

写本に触れる機会を失って何年になるか。もう変体仮名は読めないと諦めながら写本を眺めてみたが、スラスラ読める。奇妙な記号(変体仮名)にふれた頃を思い出した。

人生には、何度かの選択を迫られるターニングポイントがあるという。私の場合は、大学を退学するかどうかの選択がそうだった。その頃、私は恋人・清輔と出会った。

なからへはまたこのころやしのはれん

うしと見し世そいまは恋しき

藤原 清輔

この歌は、藤原定家の秀歌撰(実はそうではないのだが)とされる「百人一首」に採られていることから、知る人も多いだろう。私がこの歌と出会ったのは大学2回生の時だ。国文学科に在籍しながら国文学に興味を持たず、煩悶の日々を過ごしていた。まさに「この世は憂し」の状態であった私が恋した人、それが藤原清輔だった。

「百人一首」の話をしておきたい。カルタで馴染み深い「百人一首」は通称で、文学史上は『小倉山荘色紙和歌』と呼ばれている。その名が示すように、定家が子息・為家の岳父に頼まれてその山荘を飾る色紙に適した和歌百首を選んだものが原形であり、数多くの注釈書が存在する。その一つ『宗祇抄』には次のような説明がある。

心まことに明なり たゞよの中の人たのむまし
き行すゑをたのむもの成り

この哥をくはんすへきものにこそ人のためけう
かいのたよりなるへし

哥にはことほりをほめすしてこころにもたせて
いへるはつねの事なり

かやうに又ことほりをせめておもしろきも一昧
の事なるへし

この注釈を読んだのは卒業論文のテーマを考え始めたころだったが、「この世は憂し」状態の私には、宗祇をはじめ数多くの歌人たちがこの「なからへは」の詠をどのように解釈していたかなどには何の関心もなかった。ただ、この注釈に記すように、2回生の私にも「人は、頼りにすべきではない将来を頼ってしまう

ものなのだ」ということは感じ取ることができた。

古典を読むとき、現代語訳を読み、本文を一応理解しなければ鑑賞できないと思う人もいるだろうが、コマーシャルではないが、「それはまちがいです」。和歌の解釈を多く手がけてみると、現代語訳がどれほど危ういことかが分かる。

「憂し」を現代語に置き換えると、どうなるか。

『古語辞典』には、

①ゆううつだ、苦しい、なやましい

②いやだ、気に入くない

③煩わしい、気が進まない④無情だ

⑤恨めしい

『古語辞典』角川書店

とある。「なからへば」の詠には、どの意味が適当か。①という人もいれば、③という人もいるだろう。いや絶対④以外にはないという人もいるだろうか。当時の私は①～④の意を合わせた意味だと考えた。正解は？ 藤原清輔にだって答えられないはずだ。「想い」を言葉で表現し尽くすことなどできない。同時代を生きる人間同士でさえ他者の「想い」を完璧に理解することは難しい。まして遙か昔の時代を生きた人の計り知れない「想い」を包含した言葉「うし」を現代語に置き換え、分かつとすると、無理な話だ。しかも、当時の歌壇は藤原清輔を当主とする名門・六条藤家と藤原俊成を当主とする新勢力の御子左家とが激しく争う状況であった。多数の崇拜者に支えられ勢力を増す藤原俊成と孤独に対峙しなければならなかった藤原清輔の苦悩は、誰にも推し量れない。その「想い」を「うし」の語に集約したのではないか。

古典を賛美する声に反し、多くの若者が古文に興味を抱けないのは、古語を現代語に置き換える作業が古典を学ぶことだと思いついでいる指導方法に、原因があるのではないか。当時の私もその一人であったのだが、幸いにも新しい興味を見つけたことができた。それが「伝本研究」だった。学ぶ意欲を喪失し、寡黙で無表情だった私は、平仮名・片仮名・漢字の世界を離れ、変体仮名という未知の記号をよむ世界に逃げ込んだのだ。その世界には新しい道があった。時には道草をしながらも、私は今もその道を歩んでいる。

私のおすすめ3冊

講師 仲宗根 充 修 (仏教学)

1. 『リア王』

ウィリアム・シェイクスピア；福田恒存 訳／新潮社

年老いたリア王は三人の娘に領地を譲ることを決心する。王に甘い言葉を並べ立てる長女と次女とは対照的に、三女は真実の言葉を述べる。王は三女を勘当して、長女と次女に領地を譲渡する。領地を譲渡された長女と次女は態度を一変させ、驕慢な王を冷遇する。この後、物語は凄まじい愛憎劇へと展開する。発狂した王が、両眼をえぐりとられたグロスター伯に向かって述べる、「生まれ落ちるや、誰も大声挙げて泣叫ぶ、阿呆ばかりの大きな舞台に突出されたのが悲しゅうてな」という台詞はあまりにも有名。

2. 『地獄変・^{ちやうとう}偷盗』

芥川龍之介／新潮社

ここに収録される6編は、芥川龍之介の「王朝物」と言われる、『宇治拾遺物語』或いは『今昔物語』から素材を得た歴史小説である。『地獄変』は、堀川の大殿様から地獄変の屏風を描くようにと依頼された絵師良秀が、地獄で苦しむ罪人の姿をリアルに再現するために、最愛の娘に、燃えさかる炎の中で身を焼かれて悶え苦しむ姿を再現させる物語。『偷盗』は、荒廃した京の都を舞台に、妖艶な色香で何人もの男たちを翻弄する女盗人の沙金に対して、狂おしいまでの恋心を抱く太郎と次郎の兄弟の愛憎劇。他『藪の中』等4編。

3. 『罪と罰』

ドストエフスキー；工藤精一郎 訳／新潮社

元大学生のラスコーリニコフは、人類は、法律をふみこえる権利がない「凡人」と、法律をふみこえる権利がある「非凡人」に分けられるという独自の理論にもとづいて、高利貸しの老婆を殺害しても、老婆の財産を人類の福祉のために転用するならば、殺人の罪は償われるという信念を持つ。ラスコーリニコフは、偶然も手伝って、完全犯罪を成功させる。しかし、予審判事ポルフィーリイは、不安と恐怖にさいなまれるラスコーリニコフに嫌疑を掛け、物的証拠を欠いたまま、巧みな心理作戦によって追及する。探偵小説としても第一級の作品。

a thousand winds

Do not stand at my grave and weep;
I am not there, I do not sleep.
I am a thousand winds that blow.
I am the diamond glints on snow.
I am the sunlight on ripened grain.
I am the gentle autumn's rain.
When you awaken in the morning's hush
I am the swift uplifting rush
Of quiet birds in circled flight.
I am the soft stars that shine at night.
Do not stand at my grave and cry;
I am not there, I did not die.

千の風になって

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜は星になって あなたを見守る
私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 死んでなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
あの大きな空を 吹きわたっています

※ 英語でかかれたわずか12行の詩。欧米では何十年前前から朗読されている有名な詩であるが作者は不明。

『千の風になって』 (講談社) より
原詩/作者不明
日本語詩/新井 満

「幸福な食卓」を読んで

食物栄養専攻2回生 川越二美

ある日、父親が突如「父さんを辞める」と宣言した中原家。そんな父の心の崩壊を機に、優秀な長男は大学進学を諦め農業に精を出し、母親は家を出る。戸惑う長女・佐和子だったが、毎朝の食卓と家庭は淡々と続いていく。そんな様子を長女・佐和子の目を通して書かれている作品である。

『幸福な食卓』実に良いタイトルではないか。この本を本屋で見つけた時の私の感想である。食物栄養専攻では、栄養のことや料理の作り方だけでなく食事を誰とするかや、家族で食卓を囲むことの大切さも学ぶので、この本を自然と手に取ったのだろう。

この作品は冒頭でも述べたように、物語がとても淡々と進んでいく。そのため、読んでいると、この話の結末はどうなるのだろう、という思いで読み進めていった。しかし、淡々としている中に、ところどころで家族の温かさや、必ず家族の個々の出来事をお互いに報告するといった様子が、とても自然に書かれているのである。そんな風景は本来は当たり前のことであって、決して不思議なことでもなんでもないのだと思う。きっと食卓をきちんと囲んで食事をしているという家庭が少なくなっているから、ほほえましい光景だというふうを感じるのであろう。

成長していけばいくほど、それぞれの時間が増える。学校や仕事、バイトなど。そうすると、家族が揃って話をするという時間は減る。すると朝と夜、食卓を囲む時間が唯一の家族のコミュニケーションをとれる時間となるのではないか。この本の私が好きな所は、何があっても、必ず家族が食卓を囲む所である。そうすることによって、家族のちょっとした変化に気づくことが出来るのである。例えば、主人公の佐和子は、梅雨の時期、体調が悪くなる。それは梅雨の時に父親が自殺未遂を起こし、その場面を見てしまった故、それを思い出してしまうからな

のだが、そんな朝、パンにマーマレードもバターも付けない佐和子に「調子悪いの？」と兄の直ちゃんが聞くのだが、そんなこと、普段からのパンを食べる様子を知ってないとか聞かないであろう。そんな何気ない場面なのだが、私にはとても良い場面に思えた。

皆さんにとって家族はどんな存在なのであろう。主人公・佐和子の恋人の大浦君が交通事故で亡くなり、佐和子は何日間も塞ぎ込んでしまい、食卓を囲んでも家族に冷たい態度をとってしまうのだが、ある日、兄の恋人のヨシコに「もっと家族に甘えたらいいのって思うよ。家族は作るのは大変だけど、その分めったになくならないからさ」と言われ、元気を取り戻していく。私はその言葉を読み、本当にそうだなと思った。家族には、言いたい事やわがままを言うことが出来るし、どんなにけんかをしてしても絶交することはない。私にとって家族というのは、そういう存在だし、だからこそ大事にしなくてはならないのだと思う。

食卓を囲むこと、それは家族を大事にすることにつながっている。当たり前のようにしていることでも、それはとても大切なことなのである。そんなことを感じた作品であった。

『幸福な食卓』 瀬尾まいこ 著 (講談社)

